

「令和7年度第2回 旭川市包括的支援体制整備検討会」会議録要旨

<概要>

- 1 日 時 令和8年3月18日(水) 18時30分から20時30分まで
- 2 場 所 旭川市総合庁舎7階(旭川市7条通9丁目)会議室B
- 3 参加者 10名
- 4 事務局
 - 旭川市福祉保険部
 - ・ 福祉保険部次長(福祉保険課長)、福祉保険課主幹(地域福祉係長)、地域福祉係主査、地域福祉係員
 - 旭川市社会福祉協議会(市社協)地域共生課
 - ・ 地域共生課長補佐(統括支援員)
 - ・ 地域まるごと支援員(支援員A～D【A～D各地域の担当者】)

<会議録>

1 開会

定刻により、事務局から開会を宣言する。

2 議題

(1) 生活支援体制整備事業における第2層生活支援コーディネーターの取組について

重層的支援体制整備事業として実施する「地域づくり」に関する事業のうち、生活支援体制整備事業における第2層生活支援コーディネーター(=地域まるごと支援員)からA～D各地域の取組に係る説明を行った。質疑応答・意見交換の内容については次のとおり。

(A氏) 除雪対象者のうち〇〇さんのところだけ除雪しているのにうちはしてくれないのかというような話が出るころはなかったのか。

(支援員A氏) この活動に対しては、町内会全体を対象としているのではなく、社会福祉協議会に依頼があった個人宅に対しての活動であるため、この事業に関しては、あの家は除雪しているのにうちは除雪してくれないといったような意見はなかった。

(A氏) 私の住む地域においては、町内会費等をみんな平等に納めているにも関わらず、あそこの家だけ除雪してうちは除雪してくれないのかという意見が出た。そのような意見が出ないのか心配である。

(支援員A氏) 広く活動を周知するとそういった形の意見が出ることも考えられる。また説明が不足していたが、今回の活動は通年で行う除雪活動であり、12月から3月までの間15センチ以上雪が降ったときに、中学生が保護者の方と一緒に玄関前に1本の通路を作る除雪活動を行っている。

その周りの家庭や町内に除雪活動を広めてないというものもあるが、現状本活動に対する意見等はない状況である。

(B氏) 除雪活動を行っているのは1人か。

(支援員A氏) 依頼者さん1人と生徒1人である。

(C氏) 除雪を希望している高齢者の情報があり、その方のお宅に派遣し、お手伝いに入ってもらったということか。

(支援員A氏) そのとおりである。

(C氏) 先ほどの質問ともつながるが、除雪の希望者がどのくらいおり、その中で今回どのような形でマッチングして除雪に入ることになったのか。また、除雪活動を行う者は1人ということで、活動できる件数にも限りがあり、他にも除雪を希望していた方がいた場合、そのニーズに対応できない状況も考えられるため、その辺もう少し詳しく教えていただきたい。

(支援員A氏) 総数は細かく把握していないが、旭川市内全体で200件程度除雪してほしいという依頼者がおり、今回の依頼者の状況でいうと一人暮らしの90代の高齢男性の方でした。現状お体も元気である状況であるが、ご自身で除雪することが年々厳しくなり、多少お金がかかっても除雪を自分以外の誰かにお願いしたいということで、社会福祉協議会の除雪相談窓口につながったものとなっている。

基本的な条件として、一人で除雪ができない、家族が近くにいない、年齢制限、年齢が若い方だと障害の有無といった制限が色々あるが、そういった方を対象にしている事業である。

今回中学生が除雪活動を行ったお宅は、家の近くで除雪を希望しているお宅が1件あったということで紹介しマッチングした。実はもう1件家の近くに除雪を希望するお宅があったが、いきなり2件の活動を行うことは負担が大きく、もしかしたら途中でくじけてしまう可能性もあるということで、まずは1件からスタ

ートすることとなった。もう1件の方は、今後中学生がマッチングできなかった場合に改めて探すような経過になっている。

除雪の担い手が不足しており、マッチングしきれない世帯があることが福祉除雪の課題である。

(C氏) 除雪の希望者が多い一方で、除雪の担い手が少ないという中では当然、うちのところもやってほしいという要望が出る可能性が高いだろうと聞いていて思う。ある程度優先順位が高い方を中心に、中学生に除雪をしていただいたということか。

(D氏) 不登校の中学生について、最初からスムーズに除雪活動をすることができたのか。それとも結構時間がかかったのか。

また、除雪活動に励むことにより、生徒の生活状況が少し変わったとか、学校に行けるようなモチベーションが少しずつ上がってきたとか、その辺の変化とかは見られているのか。

(支援員A氏) 当初思っていたよりはスムーズに行けたと思っている。学校の先生方がすごく協力的であり、学校側もすぐ保護者と本人にアプローチをかけてくれて、先生たちから直接こういうことやろうよと背中を押してくれた。マッチング当日も先生と一緒に来てくれて、生徒に声をかけながら、どんな形でやっていくのかっていうのを話しながら、説明しながら進めてくれたのもあり、相談があって1、2週間ほどでマッチングが叶ったのかなと思う。除雪する箇所もあまり広くないこと、保護者からもそういった活動をさせたいとの意向があったことで、積極的に参加してくれたため、スムーズに進んでいった。

その後の生徒の動きであるが、最近の動きは直接本人から聞いておらず、学校へ登校再会したという話を聞いてない状況である。学校に通わなくなってしまったことにより、昼夜逆転傾向にあったと聞いている。

除雪の時間帯もその子の生活習慣に合わせてお昼ごろに設定していたものの、起きられるかどうか心配していたと聞いていたが、現状少なくとも午前中からお昼にかけて除雪活動を行っているとのことで、除雪活動を通じて生活習慣が学校へ行く時間帯に戻りつつあるという点については、若干プラスに作用していると思うが、まだ劇的な何かが得られているような状況ではない。

(A氏) この活動は無償ボランティアか有償ボランティアか。

(支援員A氏) 元々の除雪のマッチング事業が有償ボランティアであるため、有償ボランティアとなっている。お金が少なからず出るというのも動機の一つになるのかなとは思っている。

(A氏) 有償ということは時間単位か。

(支援員A氏) 時間単位で30分以内で500円である。

(A氏) 活動者は傷害保険に入っているのか。かけたのか。

(支援員A氏) 保険はボランティアとして登録するタイミングでかけている。

(E氏) アンケートを配布したところ60%の回答があり、その中で258人からボランティア協力ができるという回答があったということだが、細かくなっていいが、この258人の年齢層はどうなっているのか。

(支援員B氏) 年齢層については具体的に把握していない。

(E氏) 難しかった点というところで、今後若い世代に興味を持ってもらえるようにという記載があったため、あまり若い世代が入っていないのかなと推測してしまった。

(F氏) この若い世代に興味を持ってもらえるような工夫が必要であるというところで、先ほどのA地域の取り組み、学校との連携はとてもいい取り組みだなと思って聞いていたが、新旭川地区も学校との連携や、メンバーに学校関係者を入れるといった検討はしているのか。

(支援員B氏) 新旭川地区の社会資源を積極的に活用していく方向性で意見交換をしているが、御意見いただいた学校という視点は話し合いでは出てなかった視点であったため、今後検討していきたい。今話し合いの場に出ているのが、施設や社会福祉法人、企業といった視点であったため、学校の視点も取り入れていきたい。

(G氏) 2500戸にアンケートを配付したというあたりから、すごい取り組みだなと思っていたが、さらに具体的になってきており、期待できる取り組みだなと思っています。

る。障害、高齢分野の4事業所も委員のメンバーとして参加しているということも力強いなと思っている。ぜひ積極的に福祉施設と関わりを持ちながら、地域づくりをやっていただけたらと考えている。

若い世代がボランティアに興味を持ってもらえるような工夫については、春光台の例で言うと、学校運営協議会にて地域の中で子供を育てようという動きをしている。例えば地域でフラワーロードという花壇を作る取組に学校も参加している。そういった取り組みを学校運営協議会の方でやっており、そういった機会を通して学校の先生や校長先生ともつながりが作れるかもしれない。地域の役員は高齢化してきており、何かやろうって言ってもなかなか動けない、あるいは同じ人がいくつもの役職に就いているなど、地域だけではなかなか難しいため、様々な団体や若い人たち、学校とつながることでPTAにも声をかけられるようになるため、そういった動きも少ししたらいいかなという感想を持った。素晴らしい取組であると思う。

(H氏)

PTA 会長として学校運営委員会にも参加させていただいているが、ボランティアでよく課題として挙がる買い物やごみ出しといったちょっとした困りごとを抱えている方は、私の地域や町内でもよく見かけられ、そういった若い人の力を借りたいという時に中学生がボランティアとして参加してくれたらなと思っている。

しかし、中学生をボランティアの担い手として募集する場合、町内会が中心に何か発令するのがいいのか、学校運営委員会やコミュニティスクールにて、地域に中学校を打ち出したっていうことを先に思って、地区社会福祉協議会等に話を持っていくのがスムーズなのか、それともPTAで何か活動するときに子どもを巻き込んで地域のために何かをやらないかという発令をした方がやりやすいのか、いつもどこに声を掛ければいいのか悩んでいる。アプローチする際の場所や方法についてアドバイスをいただきたい。

(支援員B氏)

学校との連携という点に関しては協議中の段階であるとともに、学校という視点もあるということをお話させていただいた。

現時点では地区ボランティアセンターを地区社会福祉協議会の活動ですと謳わないで、ボランティアグループとして進めていきたいなと考えている。若い世代を取り込むために、グループ名を工夫したりユニフォームを作ったりしてはどうかといったような話し合いしかできていない状況であったため、学校との連携といった部分はお話いただいた通り必要な視点であると思う。

今後ボランティアグループとして、ボランティア研修会のようなものを開催し

てみたいと思っており、学校にもボランティア研修会の周知チラシを配布し若者を巻き込んでいけたらと思う。資料に地域居場所づくり推進委員会とあるが、地区ボランティアセンターの取り組みだけでなく、地域食堂の取り組みについても話し合っており、地域食堂に参加してみませんかと新旭川地区の小学校にチラシを配布しているため、そういった取り組みで学校と繋がっていることから、今後も継続していきたい。

(C氏) 中核として実施する母体は地区ボランティアセンターになるということか。

(支援員B氏) 実施の中核は地区ボランティアセンターである。

(C氏) 地区ボランティアセンターが主導で、学校やこういった地域の事業所等を様々な形で巻き込んでいき、実務的な運営の部分などはある程度役割分担しつつ、ボランティアのマッチングや、取り組みを地域に広く普及させていくという点については、地区ボランティアセンターが先頭を切って普及させていくような流れを作っていくということがわかりやすいと思う。実際そういった計画で進める予定はあったのか。

(支援員B氏) 今協議中ではあるが、地区ボランティアセンターの主軸となるコーディネーター役になるところを新旭川地区に存在する社会福祉法人、あるいは福祉事業所にお願ひできないかと計画している。

(C氏) その場合、どこにどういう形で依頼したらいいのか現時点で決まっていることはあるのか。

(支援員B氏) 現時点では具体的な話まで進んでいないが、新旭川地区は広いため1か所の大きい組織を作るのではなく、5つのブロックに分けて地区ボランティアセンターを設置したいと考えている。

まずは新富地区をモデルとしてスタートしたいと考えており、新富地域の町内会に「旭新おたすけ隊」というものがあり、そこは町内会でボランティアグループを設置しており、除雪やごみ出しといったちょっとした困りごとを町内会で解決できるような取り組みを既に実施している。町内会のリーダー役が新富地域にあり、新旭川地区ボランティアセンターについても介入してくれている。既にボランティアグループとしてのノウハウを持っている新富地区ボランティアセンタ

ーをモデル地区として実施し、そこから4ブロックに派生していくようなイメージで進んでいる。

今のところは新富地域ボランティアセンターも、コーディネーター役を近隣の社会福祉法人にお願いする方向で進んでいる。

(市社協地域共生課長補佐)

地区ボランティアセンターは旭川市ボランティアセンターとは全く別のものである。旭川市ボランティアセンターは全市的な取り組みとしてボランティアをしてほしい人とできる人のマッチングを行っている。

例えば旭川市ボランティアセンターに緑が丘地区でテレビがつかなくなったという連絡があった場合、旭川市ボランティアセンターから全市的な何かしらの案内をかけて、テレビの修理が得意な人が見つければ、緑が丘のこの人のところに行ってテレビを修理してきてほしいと調整する。全市的な調整には時間も労力もかかるが、もし緑が丘に地区ボランティアセンターという仕組みがあれば、困りごとを地域の中ですぐに解決できたかもしれない。そういった地域が作れたらいいなという考えのもと、地区ボランティアセンターをそれぞれの地区に設置できたらいいなという思いを持って進めているところである。

一方で緑が丘地区社協の会長のところに、緑ヶ丘地区の人の困りごとが全て集まるのも酷であることから、地区ボランティアセンターとしての事務局機能をどうするかということが一つのネックになっているところを、今回新旭川地区では社会福祉法人がそれを担ってくれる可能性があるということは、地区ボランティアセンターの設置を進めていくうえで大きな前進であると認識している。

学校とのつながりは地区ボランティアセンターだけでなく、他の全体的な活動でも、なかなか難しいと感じている。旭川市ボランティアセンターや、社会福祉協議会を通じて学校に対し、一緒に活動しませんかとお誘いはするも、学校は学校のカリキュラムがあつたりするため、手が上がってくる学校は多くはない現状である。

しかし、この活動を一緒にしたいといったような、依頼内容をピンポイントに限定すると手伝ってくれることもある。

町内会の花壇整備やサロンの手伝い依頼といったようなピンポイントな活動であれば、学校も協力しやすくてつながりは比較的作りやすいと感じている。ぼんやりとした依頼内容であると学校側はきっと動きづらいのではないかと推測する。一方で一部の熱意のある先生からはピンポイントでこれがやりたい、こういうことがしたいといった要望がある。学校の中より熱意のある先生を把握しておくこ

ともコツなのかもしれない。

(B氏) 龍谷高校のインターアクト部と繋がっているが、その経過として最初に高校の先生と繋がり、その先生が勤務する高校にはインターアクト部があるとの話を聞き、地域食堂の運営ボランティアとしてインターアクト部の生徒が参加してくれている。地域食堂にボランティアとして参加してくれている生徒が卒業後の進路を教えてくれたり、市内の大学に進学した生徒は大学進学後も日程が合えばボランティアに来てくれている。

(C氏) 資料の目的というところに施設の作業負担軽減と書いてあるが、ウエスとたんぽ作成というのは施設としてこなさなければならないノルマか何かがあるのか。

(支援員C氏) ノルマはないが、今まで施設職員が本来業務の合間に行っていた作業をボランティアにお願いできないかということで、作業依頼がボランティアセンターのところにあった。

(C氏) 施設で行われている日中活動の一環として職員がこの作業を行っているのか。

(H氏) 利用者が自立活動を行うための道具の作成作業を施設職員の本来業務の合間で行っていたが、それを高校生のボランティアが行ってくれると助かるということか。

(支援員C氏) そのとおりである。

(I氏) 今後は学校や施設、企業と連携できる活動を広げていくことを目標に掲げているが、具体的にどのようなものを考えているか。

(支援員C氏) 今回が1回目の取組なので正直なところ今後どのように発展していくかわからないが、今回の取組をベースとし成功体験を通して、違う施設や社会資源で実態把握した際に取組を広めることで、地域づくりも発展させていきたい。

(I氏) 施設とボランティアがマッチングしているところを初めて見たのですごく勉強になった。

(H氏) 地域の企業が協力してくれるということはありがたいことで、企業側も理解があってとてもいい取組であると思う。ごらくサロンは今後毎月実施するとのことだが、毎月の開催回数は何回なのか。また、サロンに送迎してくれるという便利な仕組みになったことにより、今後現在のメンバー以外の増員などの予測は立っているのか。

(支援員D氏) サロンの開催回数については、毎月1回の第3水曜日という形で決まって開催している。メンバーの増員については、このサロン自体のメンバーは随時募集をしているが、送迎利用については12名の利用が限界である。これ以上車両を増やして送迎利用者の増員は現状難しい状況のため、利用者を増やせたとしても、現時点では1名か2名である。

送迎を利用すればサロンに参加できるという人については、グリーンライフと相談し、利用者の自宅がどこの場所なのかにもよって、ルートを検討し、自宅が遠い場所であれば対応できないということもあり得る。今後そういったメンバーの増員、送迎利用者の増員というところは、グリーンライフと相談し、決めていくことになっている。

(C氏) 今後の課題として、協力者側の負担が大きくなる方法を検討する必要があるということだが、負担が大きくなるということは利用を希望する人が増えることなどが想定されるが、その場合は具体的にどう負担が大きくなるように工夫するのか。

(支援員D氏) サロンの開催が水曜日とお伝えしていたが、グリーンライフも普段デイサービスの利用者の送迎がある中で活動にご協力いただいております、水曜日がデイサービスの利用者の参加が落ち着いている曜日であるため、グリーンライフも、もし水曜日のデイサービスの利用者の方が増えてくると、ちょっともしかしたら対応が難しくなるという話がある。

前回施行時、グリーンライフの職員が4名来てくれたが、今後もずっと4名の職員が来てくれるという約束もできないため、職員が来られなくても対応できるよう、例えば送迎を利用していない方が数名いるため、そういった方々には少し早く来ていただき、送迎が到着した時の乗り降りのサポートや、荷物を先に運んでもらうといった、サロンの参加者同士での助け合いも生まれてきたら、少しグリーンライフ側の負担が軽減できるのではないかと考えている。

(C氏) 状況が変わる中でどう継続できるかという持続可能性という点で課題があると思うが、地域でグリーンライフのような協力を得られることは素晴らしいと思う。

(市社協地域共生課長補佐)

まると支援員からAからD地域の活動を紹介させていただき、紹介したような取り組みが一つでも二つでも増えたらいいなと思い活動している。どの地区も共通して頑張っていることや苦勞していることとして、地域の資源を知るための実態把握が挙げられる。こういうことに困っている、自分はこんなことができるというように声を上げていただけるものについては、必然的に情報が集まってくるためそれを活かしつつ、声を上げない方たちの困りごとや、こんなことができるといった声を一生懸命見つけようとして動き回っている結果がこのような形のマッチングにつながっていると思う。今回いただいたアドバイスなどを参考にさせていただくとともに、さらにそれぞれの地区の中で行われている活動や、「こんな人がいる」、「こんなことも困っている人がいる」というような情報があれば提供していただけると助かる。

(2) 地域課題に係る意見交換

地域課題に係る意見交換として「ゴミ屋敷の問題を抱える世帯への支援」について議論を深めることとなった。質疑応答・意見交換の内容については次のとおり。

(F氏) ごみ屋敷になった背景や、困っている方のことを知っていくにつれて、見方は変わらと思う。ごみ屋敷を片付けるというよりも、ごみ屋敷を地域の困りごととして実態を共有し話し合うなどが必要であると思う。

地域によって片付けに協力してもらえるような社会資源がある地域もあれば、違う形のところもあるかもしれない。一概にゴミを片付けるということだけでなく、この前段階の地域の困りごととして共有することが大切。みんなで話し合っていくと、ゴミの問題だけでなく他の問題も見つかるかもしれないし、ゴミ屋敷だからといって、誰かが片付けなければいけないわけじゃないかもしれない。まずは地域の中でこういう困ったことがある、困った人がいるというのであれば、まずは話し合う仕組みづくりが重要であると思う。

(C氏) ごみ屋敷の片付けにて、かつてこういうごみをどう片付けたかといったことや、ごみ屋敷に至った背景も含めて、様々な形で周知をするような機会を設けるとい

う取り組みも必要ではないかということか。

(F氏) その周知する機会に困っている人やその地域住民、専門的な知識を持っている方も入って話し合うことで片付ける方法が他に見つかったりするかもしれない。

(H氏) 旭川の場合、地域によって違うと思うが、いわゆるゴミ屋敷において困っているのはゴミ屋敷にしてしまった本人が困っていることが多いのか、それとも周りの地域の人が困っていることが多いのか。

(F氏) ケースバイケースである。近隣住民から相談に来ることもあるし、本人から来ることもある。関わっている関係機関や、誰が困っているかというところから、その人の背景を知っていく話し合いが必要であると思う。

必ずしもボランティアを集めたり、協力者を集めて片付けなければいけないというケースばかりでもないと思うため、まずは関係者と共有してから、このケースはどうしたらいいのか検討を始め、その地域や社会資源でできることがあるのかといった具体的なところを話し合っていくという段階で進んでいくのがいいと思う。

(市社協地域共生課長補佐)

今関わっているケースは、本人は困ってはいたけど発信はせず、町内会長がその方の面倒を見てくれており、そこに他の地域の方からのクレームや心配の意見が集まり、町内会長を経由して社協の方にたどり着いた。

その後本人に確認したところ、町内会や隣近所との付き合いが悪くごみを出せなくなった経過があり、ごみを出したくても出せなくなってしまい、こんな生活は良くないのは分かっているが、もう戻るができなくなってしまったと話していた。話しを聞いていくと、本人からも助けてほしいとの訴えがあり、どちらかというとな本人からの困り感の方が大きかった。

(C氏) 地域にある社会福祉法人といった専門的な視点を持つ事業体などが、ゴミ屋敷問題に先導して取り組んでいただけるような母体として整備されれば、そこから様々な形で地域を巻き込んでいくというような広がりを見せるきっかけになるかもしれないということ、先ほどの地域の説明を聞きながら感じた。現在の抱くイメージとして、そういったような活動母体がある方が望ましいという感覚はあるのか。

(市社協地域共生課長補佐)

具体的なイメージというところは正直まだ持ちきれていないが、地区ボランティアセンターのようなところは地域によってはあると思うが、全市的な取り組みとして一気に展開することは難しいと思っている。少しずつでもいいが、自分たちの住んでいる地域からはそういった家をなくしていこうという意識統一みたいなのが図れば、また違う形が取れるのかもしれないと考える。

(C氏)

ごみ屋敷の片付けという専門的な業務をいきなり経験のない一般市民にお願いすることは難しいのではないかという点では、ごみ屋敷に対する事前に理解してもらおうといったような段階を踏めば、片付けの担い手の確保に繋がる余地はあるのかこれまでの経験を踏まえてどう思うか。

(F氏)

ごみ屋敷に住む人の背景などを知ることにより、ごみ屋敷やそこに住む方に対しての見方は変わると思う。見方が変わるとこういうことだったら手伝えるのではないかといった声も生まれてくるかもしれない。

そこに住む人自身や家の状況を知ること、ボランティアでできるかもしれない、この場合は特殊清掃が必要だからボランティアでの対応は難しいため業者に依頼する、違う方法をみんなで考えるとといった様々な選択肢を検討することができる。選択肢があまりない場合もあるため、まずそのケースの状況、家の状況、背景や思いを地域住民と共有し、地域住民以外にも専門的な知識を持つ専門職や、ボランティアなどの資源をコーディネートする方とも協働することが重要である。

(C氏)

一歩踏み込んだ、可能性が広がるような意見である。

(F氏)

いきなり市内の全域で実施するというのは難しいと思うので、地域の困りごとがあったらみんな集まって話し合う共有体制が整備されているモデル地域のようなところがあるといい。

集まるからといってみんながゴミ屋敷を片付けなければならないという抵抗があると思うが、まず地域の困りごとをみんなで話し合っ共有しましょうというところから始められればいい。地域の困りごとに興味を持って、協力者がいるような地域があれば、そこをモデル地域として実施してみてもどうか。必ずしも集まったから、ゴミ屋敷を清掃する集まりではないと思う。

(市社協地域共生課長補佐)

困りごとの中の一つにごみ屋敷という問題があった。

(F氏)

ごみ屋敷に住む人や地域住民と話をしていくと、もしかしたらごみ屋敷以外の困りごともあるかもしれない。地域によって様々な色があると思うが、地域の困りごとを一緒に考えてみたいという地域があれば地域内での共有体制を整備してみる。

(C氏)

ごみ屋敷の背景など、ごみ屋敷という問題が地域で身近に存在するということを地域のある程度の単位の中で周知や理解を進めていく中で、ごみ屋敷を実際に片付け始めるにあたり、地域住民などのボランティアに行ってもらえる範囲、専門家といった何らかの介入が必要な範囲、ごみ屋敷の状況に応じて段階的に整理する必要があるかもしれない。

(地域福祉係主査)

ごみ屋敷は外から見える状況だけであり、その背景には本人が抱えている、例えば障害なのか、個性なのか、何なのか分からないがそういったものがあって表出されてきているのがごみ屋敷である。

ゴミ屋敷は良くないが、そこに住む人は何に困っていてこうなったのだろうかと思いを巡らせると少しでも地域の理解は広まっていく可能性がある。しかし実際に結局誰が片付けるのかといった議論に終始してしまわないのかなと思っている。

ごみ屋敷は良くないことだが、地域には様々な人がいて、様々な配慮が必要な人がいて、そういった気持ちを持ってみんなで生活していくことが地域であるということを感じてもらえるような話し合いにすべきではないかと前回の話し合いを通じて感じている。でも実際に話し合いを進めていくと、個人やごみ屋敷を批判してしまうような話し合いになってしまう可能性もあるのではないかなと思っている。

こういった形で話し合いを持っていけば、さきほど言ったような目的が達成できる話し合いになるのかなと前回の会議でもすごく感じており、何か意見を聞けたら嬉しいなと思っている。

(C氏)

ごみ屋敷問題は身近な問題であるということの住民理解を身近に広げていく中で、ごみ屋敷がうちの近くにもあるというような話になると、どうしても本人の問題とごみ屋敷という問題を切り分けて捉えられなくなる人もいます。ごみ屋敷へ

の準備理解を進める場では、本人の問題とごみ屋敷の問題を切り話して捉えるところを合わせて説明をも合わせて行うことは必要であると思う。

ごみ屋敷に対する誹謗中傷につながらないようにということ意識をした上で、ごみ屋敷問題の理解を進めていくということが合わせて重要だと改めて思う。専門家が主導して進めていくということ、その過程でも誹謗中傷にならないように注意を払っていくことが重要。本人の背景まで押さえていくことが必要というのはそういうことにもつながっていくのだろうと思う。

(F氏)

専門家も必要だが、その住民の背景を知っている情報提供者も必要である。そこにどんな人が住んでいるかわからないが、この家嫌だという人ばかりだと、批判的な話が多くなるため、そこに住んでいる人に寄り添える人が増えてもらいたいため、そこに住む方のことを知っている人が、その方のことを紹介するというのも必要。住民の人ばかりではなく、そこに対する第三者の視点も重要である。

ごみ屋敷の事例に関する事例検討会を行った際、最初は何十年間もごみの上で寝起きしているという言葉聞き否定的に感じていた人もいたと思うが、関わった支援員がその人の背景を話している間に、会場全体がその人の見方が変わったように感じた。関わった支援員がその人のことを知って、どうにか一緒に関わっていきたいという思いを持って事例を提供することで、その思いが伝わったのだと思う。

事例検討会の最後には、相談者の心に寄り添う視点を共有することができていた。

(C氏)

ごみ屋敷を実際に片付けるとなったとき、背景を踏まえつつ、本人がどこまで綺麗にしたいかという点も重要であると思う。片付ける側がどこまで片付けなければならないとか、やらなければならないとかだけではなく、本人の目線に立って最低限どこまで片付けることが必要かという目線もありつつ、どうしても綺麗にしなければならないというわけではないかなと個人的に思っている。あくまでも健康被害に影響を及ぼさない限りといったラインがあっただけかなと思っており、本人の実態と意向にも寄り添いつつ片付けを進めていく必要があると思う。

一方で、ごみ屋敷の片付けに係る担い手を増やすということも重要であるため、地域住民に地域のボランティアの活動の一環として何か協力していただける人を集めることも必要であると思う。それは個人だけによらず、法人等の様々なところを巻き込んで、担い手としての先導を切っただけのところを育てていくということも含め、地域の民生委員や町内会を巻き込みキーパーソンをつなげてい

く仕組みがあってもいいかなと思う。

(F氏)

まるごと支援員やボランティアセンターが地域の担い手を探したり育てたりしているが、ごみ屋敷の片付けの担い手以外にも、ごみを運び出すために冬場だと除雪をしなければならないため除雪してくれる人が必要だし、物を出したあと外で分別する人も必要である。作業を切り分け、スポット的に担い手を見つけるというのであれば、今のボランティアを集めるスキームの中で集まるのではないか。分業ができるかわからないが、新たな仕組みを構築するよりは今あるものを最大限に利用する方が現実的であると思う。

(市社協地域共生課長補佐)

作業の切り分けによって、関わるができる担い手は生まれると思う。

ごみの片付けを手伝ってくれる人はいないかとアンケート取ったとしたら意外と出てくると思う。実際にごみ屋敷の片付けを行っているのを見かけて町内会の方が手伝ってくれたこともあった。

意外とごみ屋敷の片付けに意欲のある人たちは地域に存在する。事例検討会のようなものを開催し、その人となりを知ってもらった上で、この人を知ってこの人を支えよう、そのために片付けようという意思統一が図れたら、すごくいいものができるだろうなと思っている。

(C氏)

作業を分担し、ピンポイントで手伝っていただけるということであれば、責任や負担というところも多少軽減できる場所があると思うので、様々な場面を想定し仕組みを作りつつ、まずは実際に活動できる地域住民を集められるきっかけを何らかの形で作ってみたいのではないかと思った。

(G氏)

ごみ屋敷の問題は直接関わったことがないので実態はよくわからないが、前回の検討会に参加させていただいた際、社会福祉施設としてどういう関わり、お手伝いができますかと聞いた時、その時に返ってきた答えが、ごみを片付ける日の着替えやお昼ご飯を食べる場所として、駐車場を貸してほしいであるとか、ごみ袋が足りないからもし提供してくれればありがたいというような内容であった。福祉施設として何がお手伝いできるか、どういった協力体制を構築できるかといった時に、どこの地域で片付けをやっていて、こういう要請が来ているが、ゴミ袋提供できる施設はないかだとか、駐車場貸してくれるところありませんかというような情報は流すことができる。

また、昨年防災ということテーマに社会福祉施設全体の連絡網を作成した。その連絡網は実はまるごと支援員の担当地区ごとに分けて作成しており、担当区域内に福祉施設が十数箇所ずつ入るようにしている。例えば A 地域でゴミ屋敷の問題があり、こういうことを手伝ってほしい、あるいは物資を提供してほしいというような情報があれば、できる施設とできない施設はあるが、そういう情報はその地域の福祉施設に流すということではできると思う。

協力体制をどうするかという点は、主体的に最初から全部関わって解決したり、直接人材を何人も送るということは難しいかもしれないが、物資や場所の提供といった入り口から協力できる可能性はあるかもしれない。直接支援に関わる第一陣と、それを取り巻く第二陣として社会福祉施設協議会が協力する。他にも様々な団体があるため、何か手伝えることはないかということそれぞれの団体に情報を流し、それが何回か続いていくと、新たな動きが生まれるかもしれない。

(C氏)

ボランティア活動したい学生が集まるボランティアサークルが大学にあり、人数はさほど多くなく、学業の忙しい時期はできないといった制約があったり、危険なものを扱うような手伝いはできないが、興味のある学生は一定数存在する。ゴミ屋敷の片付けをしてみたいという学生は潜在的にもいると思う。要は危険ではなく簡単な軍手やマスクぐらいで簡単に片付けられるような危険度の低いものであればできるという方は実は沢山いたりするので、そういったボランティアに関する情報をいただき、こうした部分の活動だけでも可能だよというような柔軟な内容での案内があれば、様々な形で学生サークルや団体だけでなく、広く学校だったり地域に対し案内を出すと、少しずつゴミ屋敷の片付けに係る協力体制という課題解決に向けた取っ掛かりとなる感じがする。

(G氏)

地域福祉というのは地域住民がいて、行政、事業所があって、濃淡は別としてその3つが協力できるようになるのが地域福祉だと思うので、その一旦のお手伝いを事業所も担っていけるかなと思っている。

(B氏)

子育て支援関係の業務に携わっているので、対応するゴミ屋敷の住人はどちらかというと若いお母さんが多い。皆さんが家に行って片付けのお手伝いできるとなると難しいような気がする。本人は困り感がなく、家にお邪魔するとゴミが50~60センチの高さになっている家もあるが、そこに本人達は寝泊まりしている。台所もカップ麺のカップで山積みになっているがそれでも捨てている。

そういった家を支援しているため、お母さんの心理を考えると、お母さんと話し

たことのない他の人が行って、片付けできるのかなというのが率直な気持ちであり、仲間内と行政でごみの片付けができればいいのかなと思う。

(C氏) ほかに意見等はないか(意見等なし)

市及び地域まるごと支援員の皆様には、本会議でいただいた御意見を地域づくりの取組に活かしてほしいと思う。

3 その他

- 参加者からの質問等はなかった。

4 閉会

- 市福祉保険部次長から閉会にあたり挨拶を行った。